
ねこちゃん！

和桜白兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこちゃん！

【Zコード】

Z0476BA

【作者名】

和桜白兎

【あらすじ】

シゾンタニアに子猫がやって来た・・・だけの話（汗）

特に何をするわけでもなく、物語は進むのです。

ちょっと切り取つたお話。

シゾンタニア生活10日目。

犬舎の寝床の一角には、大きな青い毛玉がひとつ小さな青い毛玉がひとつ。

大きいのはランバーで小さいのはラピードだ。どちらも犬。

現在軍用犬と将来軍用犬。因みに親子だ。

その小さい毛玉、ラピードの隣にもうひとつ毛玉があつた。

ラピードよりひとまわりもふたまわりも小さく、大人の片手にすっぽり収まるような大きさの

黒くふわふわな毛玉だった。

大きい青い毛玉が大きな身体で小さな欠伸をひとつ。

無言で俺の存在を確認した後朝日を眺めてから小さい青い毛玉を鼻で突つついて起こした。

起こされた小さい青い毛玉は小さな身体で大きな欠伸をひとつ。

俺の方を向いて「わん」と一声挨拶した後、

朝田を眺めてから自分より小さな黒い毛玉を鼻で突つっこ起しだ。

黒い毛玉はとがった耳をぴくっと動かして身を起しつゝ、元気一ぱんほお擦りした。

小さい黒いその毛玉は

「」ちゃん

俺を見つけて、一聲鳴いた。

「子猫ね。」

「子猫よね。」

かわいいかわいいと騎士達を虜にしたその猫は、勝手に騎士団の敷地に迷い込んでしまった

ようだった。

ランパート・ラピード親子は快く受け入れて自らの寝床の一角を貸し出し、餌まで分け与えて

いたらしい。今朝まで全く気付かなかつたが。

我等が隊長は3日前くらいには『氣付いてミルクやりたい』と言っていたらしい。

暇潰しだと言つていたが、執務室の机の上には書類の山が広がっているのを

掃除に入った俺は知つている。

ユルギス達が声を枯らしながらも隊長を探す姿は誰もが知つている。

そしてそいつらの死角を突いて逃げているサボリオヤジがいるのを誰もが知つている。

連日真面目に世話をしている俺でも今朝氣付いたんだが、このサボリオヤジが真っ先に

子猫を見つけていたというのがなんだか複雑な気分だ。

仕事しりよ、隊長。

ランパードがラピードを咥えて運ぶのを真似するよつこ、ドーペードは誰が教えた訳でもなく

その黒い子猫の首元を咥えて移動していた。子猫の事をたいそう気に入っているようだ。

その姿が住民達の微笑みを誘う。

親猫も見つからずこんな小さな猫が一匹で生活できる訳がない、と
子猫の世話を騎士団に

回ってきた。騎士ってそんな面倒なこともすんのか。

そして

「あー、子猫の世話をもう少ししな、コーリー

俺、めちゃくちやうしいんだわ。

暢気に顎をかきながらのたまつた隊長の一言が俺に突き刺さった。

「なんだよなんだよ、騎士つてもつとする事あるだろー。魔物退治とか治安を守るとか

犯罪者捕まえるとか！」

だん、と手に持ったグラスを机に叩き付ける。中身はジュースだ。だつて俺、未成年だし。

騎士団の生活は俺の想像とかなり違っていて困惑つゝとばかりだ。

まず朝起きる。

全員で整列し、点呼

午前中は主に交代制で戦術論、隊列の話やら魔物の話・・・主に体を使つた勉強。

午後はまた交代制で戦術論、隊列の話やら魔物の話・・・主に座学ちよつと休憩をはさんでから倉庫の武器たちを隅々まで磨きこむ。

時間が空いたら犬の世話、掃除、掃除、掃除、犬の世話の連続だ。

それに猫の世話が加わるらしい。俺は掃除と動物の世話をするため

に騎士になつた覚えはない。

酒場で愚痴をこぼす。世話を拒否したものの、受理はされなかつたのだ。

ああ、面倒事はこつだつて下り端に回つてくる。口ネも向も無くて下り端に回つて

くへんだ。

「いいじゃない、あの子猫、とっても可愛らしい。」

「わうわう、ラッパーの傍から離れないのよね。さみせ庄屋されてしまうんだから

一石二鳥じゃない!」

「いやー、可愛くない後輩が来て残念に思つてたら、可愛い子猫がやつてくるなんて。

天は私達を見捨ててなかつたわ。」

「ナウハア、癒しよねえ。」

ヒスカとシャステイルはまるで他人事のよう。俺の言葉を受け流す。なら代わってんだ。

俺の態度が気に食わないのか、神経質なフレンが口を出した。

「ユーリ、隊長はしつかり考えて君に任せたんだからそういう物に当たるのは止め。」

「これも任務なんだからしつかり取り組まないと。」

「へいへい、将来有望な騎士サマとは違つて俺はペット達とのんびり戯れてるよ。」

「なんだよ、この扱いの違い。親父が騎士だったからって、お前最悪それ過ぎだろ。」

フレンの顔が皿に見えて引きつった。

「こいつの父親が騎士だった、というのはザーフィアスの下町にいたときから知っていた。」

下町連中から頼りにされる変わった騎士だった、らしい。

その仕事っぷりを見たわけでも無いが、こいつの父親なのだからきっと何をやらせても

そつなくこなす優秀な騎士だったのだろう、勝手にやつ想っていた。

騎士団の中でフレンの父親がどう立場かと云ふことを知るのは
今よりずっと後の話。

フレンの横りの理由を知るのはもつと後の話。

喧嘩と喧嘩と喧嘩、後に仲直りの毎日だった。

シジンタニアを離れる一〇日前。

あれから四日が経ったが子猫は一向に成長の色が見えない。

「いやー」と、使われなくなつた犬舎の一角を見つめて鳴いて、俺
に訴える。

暗く寂しい一角を見つめながら言葉を探す。

「いなくなつちまつたんだよ。アルゴスもジョンも・・・ランパー
ドも。」

子猫はわかつてこらのかいないのか、首をひとつかしげて黙り込んでしまつた。

ランパートーとこつ言葉を聞いて、耳をピクリと動かし寄つて来た小さな相棒を抱き上げる。

子猫は寂しそうにきゅんきゅん鳴く子犬を慰める為、俺の膝に乗りながらその

小さな鼻つ面にほお擦りをする。

ついでに俺の手にも擦り寄つて來た。

どちらがどちらの世話をしていったのかわからなくなる図だ。

少し前まではランパートーが親のように接していたのに。

俺もあるの子猫に慰められた氣がする。多分氣のせいだと想ひが。

自分で言ひ聞かせるように2匹に話しかける。

「明日は俺、来れないからな。餌はちゃんと置こうとくから、喧嘩す
んなよ。

「ラピード、父ちゃんの仇、打つてやるからな。」

まるで話を理解したかのように二匹は元気に返事を返した。

俺、騎士団辞めたから。

何故か仲間たちに知らせる前に真っ先に犬猫二匹に報告してしまった。

自分でどちらかしてると想ひ。

ラピードに、亡き英雄のキセルを渡すと喜々として呴えた。勿論火は付いてない。

俺たち禁煙者なんで。

ラピードはキラキラした目を輝かせ、いつものように着いてくる。

…ラピード貰えないかつてユルギスに聞いてみよ。

黒い子猫せきよとことした田でじりじりを見た。

「……お前も、来るか？」

どうせシジンターラからは人が居なくなる。

こんな状態で放つておけない。

新しい家がこいつにも必要だ。

子猫は尻尾をゆりひつと動かしてからちゃんと返事をした。

(後書き)

なんか「めんなさい」。

年の最後に何か作品を投稿したかつたんだ・・・！

劇場版は結構うる覚えクオリティ。

ユルギスさんが結構お偉いさんで合ってるよね？多分！

結局私はカロルを見つけられなかつたのだ・・・。

題名はエステルの声が「ねこちゃん！」って呼んでいるのをイメージ。
なのにエヌテルのエの字も見えないのは何故。

ジ。

連載は・・・保留です。もし気が向いたら連載小説としてアップする可能性あり。

でも、きっと物語は一切変わらないだろう・・・(汗)

私の書いた文字達を見てくださるあなたに感謝いたします！
そんなことをつづく思つ今日なのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0476ba/>

ねこちゃん！

2011年12月31日23時45分発行